

通信小海

民族の始まり、

国の役割

牧師 水草修治

*教育の恐ろしさ

教育というものは恐ろしいものだ、ある紳士と話していたときに思った。聖書の古さの話をしていたとき、私が「日本の歴史はまあせいぜい千七百年ほどですが・・・。」と話したとたんに、「なにを言いますか。日本の歴史はすでに二千六百年以上ではありませんか。」と真顔でおっしゃったのである。この紳士、決して無学な人ではない。それどころか東大工学部を出た元海軍将校である。しかし、「この方は若い日に神武天皇に始まる天皇中心の歴史を事実として教えられて数十年、それが真実であると思ひ込んでこられ

【今月のひとば】

「天の父は悪い人にも、良い人にも太陽を上らせ、雨を降らせて下さるのです。」マタイ福音書

たのである。職業についてから学問的な歴史書を読む人は少ないだろう。それで、この紳士のばあいも、戦後五十年たっても歴史認識は戦前の皇国史観を改めるチャンスがなかったのである。

軍国主義の時代、建国記念日は紀元節と呼ばれ、天孫なる神武天皇が初代天皇として即位した日とされた。即位年は紀元前六六一年。しかし、今日の常識では神武天皇は大和朝廷が皇室の歴史を飾るために作り出したフィクションである。歴史の事実としての天皇の始まりは、四・五世紀ころの大和地方の部族連合の首長、大王（おおきみ）である。だから、戦前は実際よりも千年ほどサバを讀んで大和朝廷の古さ・正統性を教えていたこととなる（角川『日本史辞典』）。

日本だけでなく、さまざまな国で支配者たちは自分がその国を治める正当な権利をもっている」と民に思い込ませるために、王族の

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里 一六 一

〒三八四一一三 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

黄色い十字架 パロの五十メートル北
ヤナシヨウの向かい

集会あんない

日曜日

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日

聖書を読む会 午前十時半

祈り会 午後七時半

*初めてのの方も歓迎します。
*個人的相談にも乗ります。

「歴史」を創作した。これは東西共通の支配者の習性といってよい。韓国にも天孫降臨を含む檀君神話があるし、古代エジプトでも王は現人神とされ、スコットランドの王族はエジプトを起源とするという神話を持っている。

小海にはその昔クジラが上ってきたという昔話があるが、実害はない。権力とは関係ない話だからだ。しかし、支配者が作り話を事実と偽って国民を洗脳するのは危険なことである。実際、かつて皇国史観に惑わされて、日本を神の国と思い込まされた世代は、ゆえなくアジアの隣国を軽侮した。軽侮していたから、侵略を罪と感じられなかった。もし日本が、どれほど過去、中国や朝鮮から多くの文化の恩沢を受けたかを教えられ、それをもとに独自の文化形成をしてきたという歴史の事実を教えられていたら、大陸の人たちを、ああは踏みつけにはできなかっただろう。

右翼的歴史観も左翼的歴史観もごめんである。国民としては、親としては、子供には本当にあったことを教えてほしいと思う。最近「新しい歴史教科書を作る会」

という皇国史観にノスタルジーを抱く民族派団体の『国民の歴史』『国民の道徳』という本を読んで、そんなことを思った。

*民族とは国家とは

ところで、そもそも民族とはなんだろう。

民族主義者は民族を神聖視するが、聖書は民族の始まりについてなんと云っているだろう。聖書は民族の始まりは、人間の傲慢の罪に対する創造主のさばきにあるという。かつて人類が一民族・一言語だったとき、彼らは一致団結して神への反逆のシンボルとしてバベルの塔を建て始めた。そこで、神は彼らのごうまんを砕くために、言葉を分けてしまわれた。結果、争いとなり、工事は中止され、諸民族が形成されることになったという(創世記十、十一章)。

民族の起源は神聖なものでなく、むしろ傲慢という罪であることを思っ、私たちは自民族絶対化という愚を犯してはならない。

では、国家とはなにか。国家主義者は国を神聖視するが、聖書の国家観はきわめてドライである。国の務めは、ヤクザを取り締まり

税金を集めて富を再分配することにある。人間はみなわがままであるから、ほつっておくと暴力団が幅を利かせることになる。だからそれを取り締まるために国がある。人間はわがまだから、金持ちばかりが得をして、貧乏人はいよいよ貧乏になる。だから国は金持ちからはたくさん、貧乏人からは少々税金を集めて、富の再分配をする。基本的には、国にはそれ以上の役割はない。国にも民族にも酔っ払わない心得を聖書は提供している。

なぜ防止には水

今年なぜをひかないぞと決意して、水を毎日ガブガブ飲んでる。これはほんとうに効果があるようだ。なぜをひくのは、鼻とどが乾燥していて、そこに菌やウイルスがくくとこれを包み込んで捨てられないからだそうである。だから、水をガブガブ飲んでいれば、喉も鼻もうるおって、なぜ防止になるというわけ。お試しを。

恵みの雪

自分の隣人を愛し、自分の敵を憎めといわれたのをあなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、雨を降らせてくださるからです。自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも同じことをしているではありませんか。

マタイ福音書五章

お祈り会するとき、「神様、夏になれば暑いと不平を言い、冬になれば寒いと文句を言い、雨が降らないと不平を言い、雨が降ると文句を言って、ほんとうに感謝の足りないものでした。神様、この大雪も恵みと感謝します。」とお祈りする人がいた。

「ああ、そうだったなあ」と、胸を衝かれる思いだった。

今年も観測史上めずらしいばかりに、信州にも雪が降っている。腰痛持ちの私も腰痛ベルトを巻いて雪をかく。豪雪地帯とちがって、雪の持つて行き場がないにも困るなどと文句を言っていたらきりがなし。新潟山間部の友人に聞いたら、正月から雪が毎日のように降り続けて八メートルになっているという。二階の屋根を越える高さだ。毎日六時間は「雪投げ」をしているそうだ。しかも、あの重い重いベタバタ雪。

他方、ケニアではここ二三年間、ほとんど雨が降っておらず、食糧・電力さらに水の供給についても危機的状況となってきた。

こういう状況を見て、人はすぐ「神がいるならどうしてこんなことにな」とつぶやきたくなる。太陽を昇らせ、雨を降らせて下さっていたときには、感謝のひとつもしないでおいで。そもそも、こんなに地球の気候がおかしくなったのは、だれの責任なか。私たちの責任ではないか。森林を伐採し、化石燃料を燃やし、自然を破壊した結果、砂漠が拡大し、大気が温暖化して、気候調節の仕組みを壊し

てしまった張本人は特に便利な国に住んでいる私たちなのである。その張本人がこの地球をくださった神に文句を言っているのは、あまりにもわがまま勝手だ、手のつけようがない奴だと思われてしまったらう。親に買ってもらった高価なおもちゃをすぐに壊してしまつて、「おとうさんが悪い。どうしてくれる。」と泣き喚いている子どものようなものではなからうか。

人間は神ではなく、あくまで人間にすぎない。神に造られた被造物なのだ。私たちが人間の分として、果たすべきことは、なんだろう。まず、神様の前に謙虚になること。そして、祈ることである。そして、ほんとうに祈っていると、今、自分が誰に対して何をしたらよいのかが示されるだろう。それは、困った人のためにお金を送ることがかもしれない。あるいは、実際に出かけてなにか奉仕することかもしれない。いずれにせよ、私たちがもつと造り主の前に謙虚になることが必要ではなからうか。

バレンタインと愛

中学の二年生のころ、バレンタイン・デーというものを知った。この知識を日本中に普及させたのは、Fという菓子屋だった。歌まで作ってハート型のチョコを売り出したのである。愛の告白は男が女に対してするものであつて、女が男に対してするのははしたないこと。ただ、二月十四日だけは女から男に向かって愛の告白をしてもよろしいという話だった。今や時代は移つて女の子のほうがつつとこういうことは積極的になつていゝるさうである。

聖バレンタインといふのは、紀元二七二年二月十四日にローマ皇帝クラウディウス の迫害によつて殉教したローマの牧師 だつた。その殉教記念日が愛の告白の日となつた理由については、いろいろ説明されるのだが、実はよくわかつていない。米国の友人に聞いたところでは、米国で

はバレンタイン・デーは単に男女の間でのみ愛を告白する日ではなくて、孫がおじいちゃん、おばあちゃんに贈り物をあげたり、お母さんがお父さんに贈り物をしたり、とにかく一般にこの日を愛の表現の日としていゝるさうである。

ところで、聖書において「愛」にあたる言葉はいくつかあるのだが、その代表的なのはアガペーという。ギリシャ語で愛と翻訳される最も一般的なことはエロースといふことばなのだが、聖書ではあえてエロースといふことばを避けて、あえてアガペーといふことばを用いていゝる。

エロースといふことばは、一言でいへば、「価値を追求する愛」である。美人だから好き、頭がいいから好き、金持ちだから好きといふふうには、エロースの愛は、なんらかの価値に対する愛である。つまり、やけどをして美人でなくなれば嫌いになり、けがをして頭が悪くなつたら嫌いになり、会社が倒産して金がなくなつたら嫌いになるというのが、エロースの愛である。愛というよりも、むしろ欲求といったほうが、その本質がはっきり見えるかもしれない。

「価値に対する欲求」を意味するエロースといふことばでは、神が私たちに示された愛は表現できないので、聖書はアガペーといふことばを使ったのである。アガペーの愛は「価値なき者のうちに価値を見出す愛」である。

「私たちがまだ弱かつたとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい者のためにも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし、私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。」ローマ五章

人の愛は、厚化粧をした欲望にすぎない。それは、結局人を幸福にはしないだろう。キリストが私たちに示された愛こそ、あなたをほんとうに生かす愛ではないだろうか。あなたを愛する神の愛を知つて、体験していただきたい。あなたの心にほんとうの平安が訪れる。